

NEW TRADITIONAL PAPER



NEW TRADITIONAL PAPER

2019 - 2020

福祉と伝統工芸とともに、
これからのものづくりを考える

人が古くから続けてきた、ものをつくるという
当たり前の行為を、つくり手や使い手、環境、
素材、持続性など、さまざまな視点・立場から
見直す動きが、いま各地で生まれています。

そんななか、福祉×伝統工芸の可能性に着目し、
新しいものづくりのあり方や伝統工芸の可能性を
模索していくプロジェクト「NEW TRADITIONAL
(以下、ニュートラ)」が始動しました。

障害のある人や、その周辺にいる人たちがとも
にものをつくり、日々、試行錯誤してきた福祉の
現場。人の多様な営みやその基盤となる環境と
ともに長い時間をかけて培われてきた伝統工芸の
技術とそのあり方。それぞれの実践者が「もの」を
介して交流し、コミュニケーションをとっていく
その先に、これからの“つくる”のありようを見
出していきます。

本誌は、ニュートラの実践のなかで培われた
思考や言葉、イメージを発信するメディアです。
これからの伝統とは何か。ものづくりのあり方と
暮らしはどう関わるのか。いろいろな人たちと
一緒に、考えていくことができれば幸いです。



“My New Traditional Collection” selected by Katsunobu Yoshida
アフリカの人形／骨・木、韓国の人形（司祭の像）／木、こけし 橋本恒平作／木
photo: Kohei Shikama

福祉と伝統工芸の現場をめぐり NEW TRADITIONALを見出す

僕たちは、これまで障害のある人の新しい仕事づくりを試行してきた。GJ!センターでは、デジタル工作機器の技術と昔ながらの手仕事を障害のある人の表現とつなぎ、新しい働きへと展開。また、障害のある人の作品を、知的財産権の活用を通して社会へと広げていく試みも行っている。

しかし、つくるものの良さを伝え、暮らしを豊かにするものづくりのあり方を考えるには、その周囲へも目を向ける必要がある。

「これからの新しい伝統工芸とは、愛と祈りのあるものだ」。たんぼぼの家の理事長・播磨靖夫の言葉を思い出しながら、全国のものづくりの実践者に話を聞く旅がはじまった。

NOTA_SHOP（滋賀県甲賀市）

01

「ニュートラとはなにか」を議論する上で、UMA/design farmの原田祐馬さんとMUESUMの多田智美さんに、一緒に考えてくれる実践者を紹介いただいた。そのひとりがNOTA&designの加藤駿介さんだ。6月頭、加藤さんの工房兼店舗兼ギャラリーのある信楽へと車を走らせた。

信楽は、1,000年続くやきものの産地＝六古窯

のひとつ。古琵琶湖層の豊かな土を用いた信楽焼は、近隣の京都や大阪といった都市文化と密接で、現在も日用品としてのやきものを制作している。

田んぼに囲まれた信楽高原鐵道・勅旨駅前の踏切をわたって、小路を進んでいくとNOTAの工房と店舗兼ギャラリーの平家が見えてくる。もともと製陶工場だった建物を改築した広大な空間だ。

店舗には、NOTAのプロダクトはもちろん、国内外の作家による作品、日用品、古道具、オブジェなどが混在しており、それらが並んでいる状況は目にも楽しい。「ひとつの器を見せるときに、周囲に置くものとの関係性や一歩引いて見たときの空間性を意識してレイアウトしています」と加藤さん。選ばれた商品の秀逸さもさることながら、ものどもの、ものと人、ものと土地の関係を見出し、その良さ・質を伝える手法にハッとさせられた。

クラフト工房 La Mano（東京都町田市）

02

8月の焼けるような日差しのなか、天然素材を用いた染織品の制作を行うLa Manoの工房へ。小さなスロープを上がっていくと、工房の入り口にある藍染の暖簾が風でたなびいているのが見える。藍



02

2019年6月から2020年3月の期間、全国各地の工房や施設を巡り、聞き取りを実施した。Good Job! センター 香芝（以下、GJ!センター）にて郷土玩具や伝統工芸と3Dプリンタの技法を組み合わせたものづくりを行う藤井克英が、その道中で考えたこと、感じたことを記していく。



03

染液の独特な匂いが漂う室内には、障害のあるつくり手とそれを支える地域のボランティア、施設スタッフが作業に励んでいた。

La Mano は、染織と刺繍を主に日用品の制作をしている。「注文を受けてから、その人の暮らしの様式に合わせてサイズ、カラーなどをコーディネートできるか検討しています」と工房長・高野さん。創意工夫を都度盛り込み、次の仕事へとつないでいるという。また、市販の素材ではなく、工房裏の山で染料となる植物を栽培し、それを使うなど、ものをつくる手前にある素材や仕組みから自分たちに引き寄せていく姿勢にも、La Manoのものづくりの豊かさを感じられる。

“つくる”を突き詰めて考えると、人や自然を分け隔てない循環が見えてくる。その全体像を見ながら一貫したものづくりをするか、役割を決めて分業するか。僕たちはどう考えるのがよいだろう。

吉勝制作所（山形県西村山郡大江町）、 橋本広司民芸（福島県郡山市）

03

2020年1月と3月、デザイナー 吉田勝信さんとの協働のため東北地方を訪れ、合わせて各地の工房などを巡った。ここで、大きく心揺さぶられる出会いがあった。ひとつは吉田さんの住居兼工房＝吉勝制作所、もうひとつは橋本広司民芸である。

古い日本家屋の居間や応接間には吉田さんが収集してきた民具や装飾品などが並ぶ。納屋には染織に使うための樹皮が大量に干されており、その光景に尋常ならざるものを感じた。吉田さん自家製の発酵食品をあてに話を聞いていくなか「山に入って自然素材を採取すること、グラフィック

デザインは地続き」という言葉に納得。山のものも、人のものも分け隔てなくある生々しさに、僕はあてられていたのだ。

三春駒と三春張子人形の発祥地として、江戸時代から続く集落にある橋本広司民芸でも同様の衝撃を受けた。そこはデコ（＝木偶人形）屋敷と呼ばれ、現在も郷土民芸品を制作・販売している。橋本さんのことは、「東北の酒と玩具 MUTO」（秋田）を訪れたときに紹介された。

「時代に合わせて、そこらへんで手に入るものでつくっている」と橋本さん。うどん粉を糊がわりにしたり、顔料と膠の代替としてアクリル絵の具を使ったり。「先代がつくってきた張子を見てみると、代々の人が考え工夫し、継がれてきた知恵が見て取れる」。室内を見渡すと、代々制作してきた品々や大きな天狗面、大人でも抱えきれないサイズの達磨などが置かれ、仏壇や囲炉裏、ご先祖の写真なども同じ空間にある。

僕が張子やお面の制作方法を聞いてみると、ひょっとこ面の話に。橋本さんの面は演者の豊かな表情がわかるように、能面と同じく小さめにつくられ、口元がくり抜かれている。「ちょっとやってみるか」と、橋本さんはお面をつけて目の前で踊ってくれた。五穀豊穰・健康祈願がこもった踊りには、祖先や自然への感謝もある。仕事も生活も祈りも祭りさえも一緒くたになって、目の前で踊る橋本さんに、僕は心を驚掴みにされた。

かつてお百姓が農閑期に、身近な素材で日用品や玩具を手づくりした、生活と仕事が地続きにある営みの形、ものづくりの循環。現代において、障害のある人やつくり手とともに、どんな形を見出せるだろうか。ニュートラの旅はつづく。 

ものをつくる前提を 引き受けること 人の表現の地平を 眺めること

インタビュー：吉田勝信

photo: Mori Yamashiro

山や森をフィールドに、自然の素材、古くから続く技術を取り入れ、ものづくりを行う吉田勝信。手や道具・素材のくせ・質から生まれる、予期せぬ“揺らぎ”を内包した表現が特徴だ。山形・大江町を拠点に活動する彼が考える「NEW TRADITIONAL」、新しい伝統工芸・ものをつくる作法について聞く。

収録：2020年3月21日(土)・22日(日)
場所：とんがりビル KUGURU (山形)

ものづくりの手前から、 「新しい」を考える

— 本プロジェクトでは、さまざまな立場の人たちと議論・実践を重ね、「NEW TRADITIONAL」の定義をああでもない、こうでもないと言いながら形づくっています。吉田さんとも、いくつかの実践、展覧会を一緒にしましたが、吉田さんは「NEW TRADITIONAL」と聞いて、どんなことを考えましたか？

生活・仕事・地縁・風習など、豊かだった人間の営みは近代化によって切り離されてきました。その結果生まれたさまざまな「溝」をデザインやものづくりで埋めることで、これからの生活や仕事について考えるきっかけが生まれます。

これは、僕がディレクターとなった「わたしのニュートラ」展のステートメントの一文です。僕がデザインとして行う多くのことには、「溝」をどう回避するかという問いが通底しています。新しいものづくりを考えるならば、「溝」を埋めたり、飛び越えていったりするような思考がものをつくるなかに組み込まれている必要がある。そうでないと、結局は社会の問題に回収されて「新しい」ものになりません。

— 吉田さんが感じている「溝」とは？

「ワークライフバランス」という言葉を耳にしますが、

もともと一体だった生活と仕事が、いまは仕事は仕事、生活は生活と分断されてしまい、その間で折り合いがつかなくなっている。オーガニック食品のお店で働いているけれど、家ではカップラーメンを食べているという矛盾もひとつの折り合いのつかなさですね。よくあることだと思いますが、いつか「私何してるんだらう？」と壁にぶち当たってしまう。

そのような分断＝溝を考えることは、仕事や生活だけでなく、その基盤となる土地や環境を考えることとも結びついていると思うんです。

僕は、2019年から地元の小さな消防団に入り、団員とともに有事の備えをしています。それは、自分たちで土地を治めていくにはどうすればいいのかという「自治」の視点で地域を見つめるためでもあって。いまの社会や都市がつくられていくにあたって、切り離していかざるをえなかった営み。つまりここにも溝があるわけですが、これを再度引き受けて

いったときに、現状を打破するヒントがあるといいなくらいの気持ちでやっています。

— なるほど。都市の効率性・機能性を重視するあまり、ある種の断絶が生まれてしまった。

そうかもしれません。ほかに、僕は食材やデザインの素材となるものを採取しに近くの山へよく入っていて。安全性の面から行政から「キノコを食べないでください」と通達があったときに、そこで「食べない」という選択をすると、採取後にどう保存して、どうおいしく食べるかといった食文化そのものが途絶えてしまう。それ自体、人間の営みや文化の否定とも言えます。ここにもひとつの溝が生まれつつあるんですね。

これからの時代を生きる人間として、どうやってその溝を埋めていくか。そして、そういった一つ

ひとつの問題、溝と考えるものを埋めていった先に、どんな状況があるのか。僕はデザイナーですから、ものをつくって試行錯誤しながら、見極めていこうとしています。

“つくる”をトレースし、つくり手の思考を辿る

— 「溝を埋めていく」という行為は、具体的にはどのようなことを指すのでしょうか。

ひとつは、過去さまざまにものをつくってきた

人たちが考えた、つくる仕組み・作法を、僕自身も手を動かしながらトレースすることです。その先に、つくった人たちのコミュニティ、広く社会みたいなものが見えるかもしれない。そういった現代の科学的なものの見方ではない思考に触れることで、新しいものづくりに近づく気がしています。

比較的わかりやすい例を出すと、毎年、山形のタウン情報誌『gatta!』新年号の表紙を担当していますが、2020年は、山形の南部地域にある「キリハライ」という風習をもとにアートワークをつくりました。キリハライとは、農業の風景と縁起物を12枚1組の切り紙にし、年末に家のなかに貼っておく風習です。南三陸や中国にも似たような風習がありますが、キリハライの特徴は、それを毎年貼り重ねていくこと。古くからある家では、とんでもない厚みになっていて、めくっていくと江戸時代まで遡ってしまう(笑)。そういった時間の堆積が物量と



上 民家の壁に貼られたキリハライ
下 吉田が作成した2020年の『gatta!』新年号の表紙

photo: Kotetsu Shimizu

して可視化されていて、また、文化として現在においても成立しているのも面白い。

— 風習をトレースしていくことで、その土地が積み重ねてきた文化を見る、ということですね。

そうです。表紙をつくるにあたって、最初はキリハライではなくて、「ネズミ浄土」という民話をモチーフにしようとしていました。この話は、みんなが知るところだと「おむすびころりん」が有名。全国に語り方の違ういろんなバリエーションがあって、山形だったら、助けてくれたネズミの案内で穴に入って、地底のネズミのお屋敷で餅つきをして帰ってくる話が一般的です。海側の地域だとネズミが魚をくれることもあるんだとか。あとは、「お餅」のような、幸福の象徴とされるモチーフが変わったり、ネズミの数が変わったり、ネズミではなくお地蔵さんになったりもしますね。

— 地域ごとに大事にしていることや規範が違い、それが語りにあらわれているんですね。

山形では、餅つき＝幸福の象徴で、僕の家にも臼と杵があるんですが、なにかあって餅つきをすとなったら、近所の人がわらわら集まってきます(笑)。山形出身の友人は「餅をつくよ」と連絡すると、だいたい断らないで手伝ってくれる。餅をつくといふことの幸福感が民話のなかと地続きに、いまでも山形に息づいているんです。それをわかりやすく縁起物として探したときに、出てきたフォーマットがキリハライでした。ネズミ浄土のモチーフを組み合わせ、グラフィックに落とし込んでいったのが『gatta!』の切り絵ですね。これは、さきほど話した溝を考えていくこと、そしてそれを乗り越えるために手を動かしてトレースしていくことの、わかりやすい事例かなと。

もともとなかった線引きを知る

— 世界中で、近年さまざまな分断があらわになってきました。もともと社会や生活のなかにあった、ジェンダーや障害といった言葉・状況をとらえ直す機会にもなっています。ものをつくるという視点で、それらをどのように越えていけるでしょうか。

ここにたんぼぼの家からお借りした、障害のあるアーティストのつくった大きな赤いお面があります。お面全体に白点が繰り返し描かれていますが、一つひとつの点は高い精度のものがあるとか、その配置

に正解があるわけではなくて、なにかがそこにあって面が埋められていることが重要な印象です。点の積み重ねが、全体の画面を決めていくようなつくり方をしている。僕がこれまで買い集めてきたコレクションのなかにも、縄模様が全体を覆う縄文土器のようなものから、骨や石・木などの素材の表面に満遍なく刻みや模様をつけていくようなものまで、同じようなトーンを見ることができます。

僕は学者でもなんでもない、ただのデザイナーなので、あくまで最終的な表現にフォーカスして、とにかく似ているものを集めていますが、それらを机に並べて眺めてみると、ひとつの反復行為から全体を驚掴みにつくってしまうような、人間がものをつくったときにどうしてもそうになってしまう意味みたいなものが見えてくる。

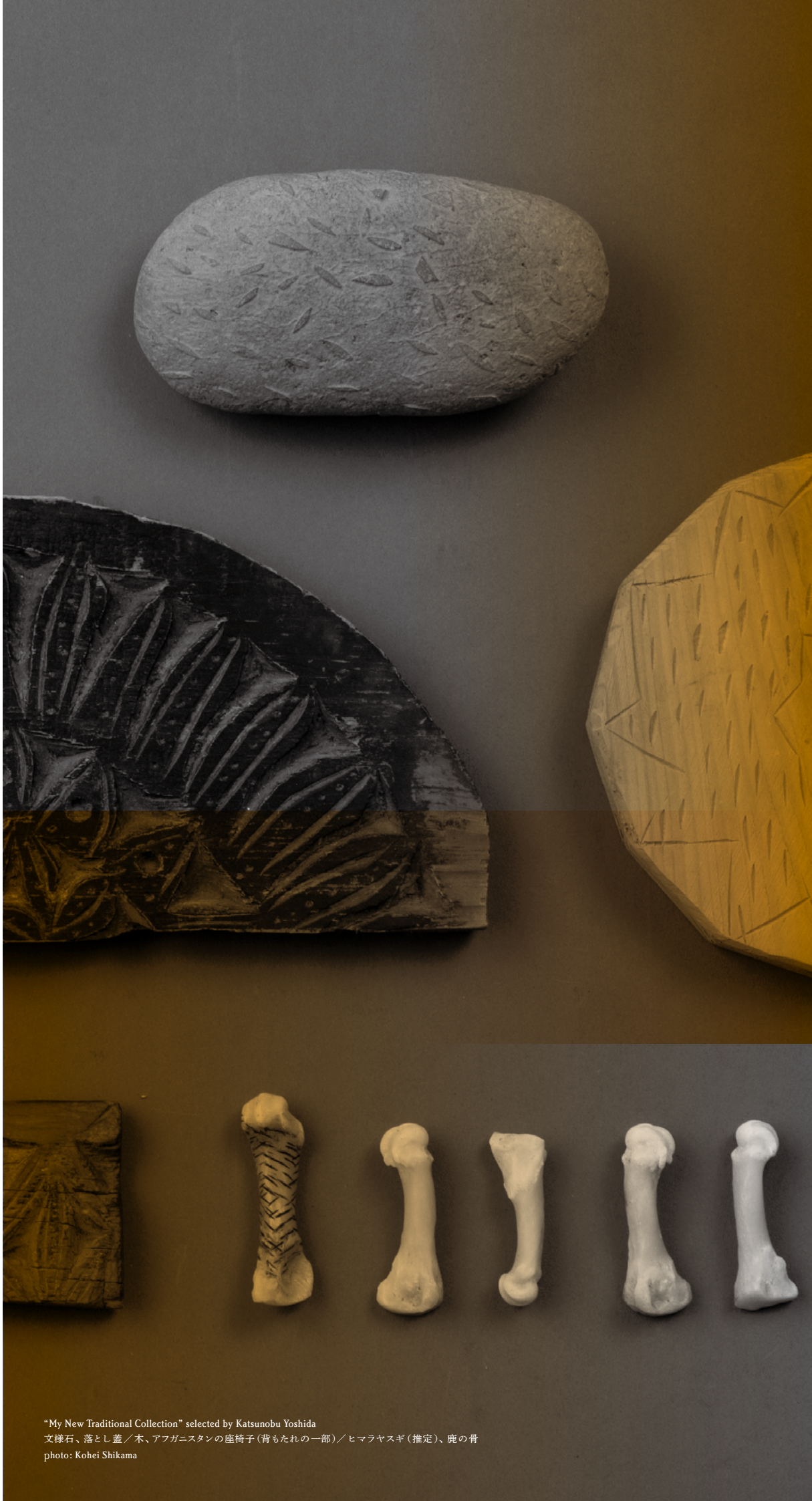
— たしかに。時代も場所も文脈も異なるものたちが、ひとつのトーンのもと集められていくと、個々の差が見えなくなっていくのを感じます。

そうです。つまり、1人～複数人がつくったかもしれないし、障害のある人がつくったかもしれないし、日本ではない場所でつくったかもしれないということ。そうやって、時代や土地の違い、障害のありなしなども関係なく、人間の表現という地平で眺めることをしている。それが答えであり、仮説であり、これからのものづくりや新しい伝統工芸を考えていく上で必要なことだと思うんです。

社会のなかにある溝や分断を調べて、もののつくられ方を分析・トレースしていくと、実は埋めようとしていた溝自体がつくられたものだとわかる。障害という言葉が意味するところもそうで、社会が効率よくまわっていくために便宜上、分けられていると言ってもいい。本来、そんな区分があるわけではないんです。これまで「溝を埋める」という表現をしていましたけれど、もともとそこにはなかった分断を、「やっぱりなかったね」と再認識していく行為でもあるのだと思います。 **T**



よしだ・かつのぶ
1987年、東京都新宿区生まれ。山形県を拠点にデザイン業を営む。グラフィックデザインを主な領域として、フィールドワークを取り入れた制作を行っている。ブランディングやコンセプトメイキング、商品企画、サービス設計などに携わる。家業の染色工房では染材、繊維の採集やテキスタイルデザインを担っている。

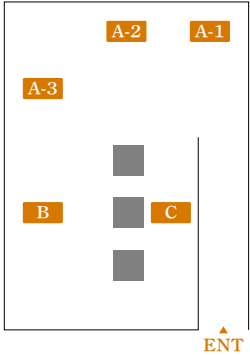


“My New Traditional Collection” selected by Katsunobu Yoshida

文様石、落とし蓋／木、アフガニスタンの座椅子(背もたれの一部)／ヒマラヤスギ(推定)、鹿の骨
photo: Kohei Shikama

Installation View

photo: Kohji Shikana



会場マップ

本展は、吉田勝信がディレクターとなり、自身が考える「NEW TRADITIONAL」を、これまで手がけてきたプロジェクトや収集物から構成。展示空間をぐるっと囲う白地のパネルに、展示物を設置し、油性ペンで直接言葉や図を書き込んでいった。展示設営・什器制作は、吉田とともにさまざまなプロジェクトで協働してきた大工の荒達宏が担当。入り口のコンセプトテキストにはじまり、各プロジェクトの登場人物紹介、山形の米沢緞通・滝沢工房と福祉施設の協働「IsKoffee」との協働、吉田による「わたしのニュートラ」セレクションへと進んでいく展示構成。

「NEW DANTSU」への挑戦 米沢緞通・滝沢工房と福祉施設の協働

古くから絹織物の産地として知られる山形県米沢市で、織機の組み立てやメンテナンスを生業に創業した米沢緞通・滝沢工房。1966年からは、独自の技術と知識を生かした高密度の絨毯「緞通」を製造してきた。伝統のものづくりと、山形で表現活動に取り組む障害のある人たちが出会うことで、新たな伝統を模索することはできないか。そんな着想から立ち上がったのが「NEW DANTSU」プロジェクト。協働を通して、緞通の図案づくりや制作工程を経験するワークショップ（以下、WS）を実施した。

山形では福祉と他分野との交流がまだまだ多くありません。吉田さんと滝沢工房さんとの出会いで、自分たちの表現がこのように生かせるのだと福祉施設の人にもものづくりの可能性を感じてもらえました。今後、ものや人の交流の関係性の線をもっと増やしたいと思っています。（武田和恵／やまがた障がい者芸術活動推進センター）

粘土による模様や斬新な色使いの絵は高揚するものでした。緞通にすることで、たまたまいも上品な商品に。緞通のパイルを抜いて好みの色糸を埋め替えたWSでは、グラフも書かず短期間で仕上げており、驚きでした。（滝沢幹夫／滝沢工房）

ねんどのじゅうたん

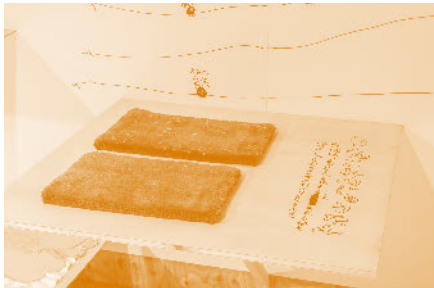
A-2



さくらんぼ共生会の障害のある人たちが親しみのある素材＝粘土を用いたWSを2回にわたって開催。絨毯制作のための木枠をひとつの画面とし、粘土をそのフレーム内に配置。初回は自身で叩いて潰し、2回目はプレス機にかけ、あらわれる模様を図案化した。展示では、図案をもとに職人が制作した絨毯を含め、プレスされた粘土などが並んだ。

うえこみのじゅうたん

A-1



絨毯にシミや焦げが生じた部分の毛をピンセットで抜き、新しい毛を挿していく補修技術「植え込み」に着目。滝沢工房代表取締役の滝沢幹夫氏を講師に、地元の福祉施設である株式会社修誠会くららに所属する障害のある人たちとともに、植え込みが織りなす点や線で模様をつくるWSを実施し、テストピースを制作。

僕のアドバイスを聞いてくれる方もいれば、自由に手を動かす方もいる。各々の得意なことや個性が生きる場をつくることを意識しました。（吉田）

えのぐのじゅうたん

A-3



社会福祉法人ほのぼの会わたしの会社に所属する絵やイラストを描くことが得意な障害のある人たちと、大きな一枚絵を制作するWSを実施。吉田がその絵の一部を緞通の実寸にトリミングすることで図案化した。展示では、作業の工程とともに、描いた絵《ブルーシート》《バナナとリンゴ》の原画と、それを織りで表現するためのグリッド上のグラフ、テストピースを配した。

利用者の方々が描いた絵は、絨毯に落とし込まれることで解像度が下がり、抽象度が高まる。その変換が新しい質感を生んでいて面白い。（吉田）

吉田勝信「わたしのニュートラ」展

NEW TRADITIONAL

ものと人をめぐるフィールドワーク

わたしのニュートラスタイル

IsKoffee

B

山形を拠点とするコーヒー豆の焙煎所「IsKoffee」との協働を、約5年間のタイムラインとともに紹介。吉田は、アートディレクターの役割で月に1度、IsKoffee オーナー・山口氏と打ち合わせを行い、グラフィックデザインやパッケージの方向性を協議してきた。

IsKoffee は、実際にコーヒー豆の産地へ向かい、農家をたずね、豆を吟味してから輸入し、独自のローストポイントを見極める手の込んだづくり方をしている。吉田は、その手間の厚みを表現するため、豆の種類ごとに、簡単に手描きできる模様を設定。スタッフが油性マジックでパッケージに模様を描くことでデザインを完成させる、デザインを専門としない人たちに由るデザインへの介入の仕組みをつくった。



新しいパッケージを考えたというメールがスタッフから届いたので見てみると、これまでのパッケージのづくり方を応用した、パッケージデザインがすでに出来上がっていました。僕がいなくても、ものをつくることができる状況に感動。「このパッケージを店頭に並べてもいいですか？」と僕に聞いてきたのも、関係性が逆転していて面白かったです。（吉田）

わたしのニュートラ

コレクション

C

吉田がこれまで手がけた作品やグラフィックデザインのための素材、収集してきた道具や祭器、郷土玩具、作品などの組み合わせによって「わたしのニュートラ」を提示するコレクション展。3つの展示台では、それぞれ“人間がものをつくる際にどうしてもあらわれてしまう”要素を集め、緩やかなルールのもと配置している。例えば、東北の新旧こけし職人が制作したこけしと、韓国の古い祭司像、アフリカの部族がつくった像の表情を、ひとつのおおらかなまとまりのなかに見出している。



自分のつくったものと、時代・土地を超えた表現を同じ台に並べてみると「あれ、これって僕がつくったのかな」と思えるほど、そのつくりになじみを感じるものもあります。まだその共通の要素をうまく言語化できていないですが、こうやってものを介して考え、議論していくことが重要だと思いました。（吉田）

エントランスと展示空間を仕切る壁は、型抜きしたコンクリートを土台に立ち上げました。コンクリは、セメント・砂利・砂・水を混ぜれば簡単にできて、そのなかにいろんな表情を入れ込めます。もっと精巧につくることもできましたが、ひび割れているとか、重量感があるとか、素材の情報量が表れることこそこの展示では重要だなど。（荒達宏／大工）



会期：2020年3月20日（金・祝）～26日（木）

会場：KUGURU

（山形県山形市七日町 2-7-23 とんがりビル 1F）

主催：文化庁、一般財団法人たんぼぼの家

協力：社会福祉法人ほのぼの会わたしの会社、

社会福祉法人さくらんぼ共生会 さくらんぼ共生園、株式会社修誠会くらら、米沢緞通・滝沢工房、やまがた障がい者芸術活動推進センター ぎやらりーら・ら・ら／しおむすびおかわり

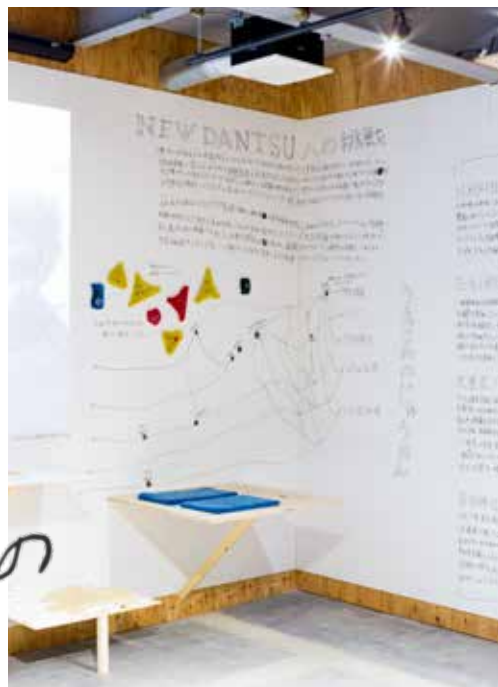


Installation View

photo: Kōhei Shikama



「植え込み」の練習 作ったもの

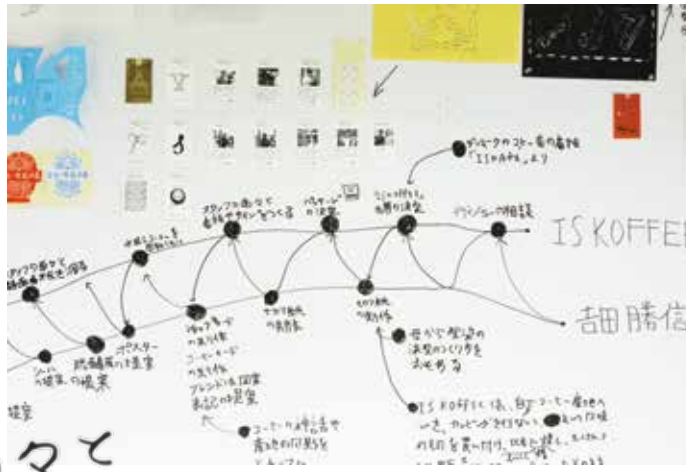


米沢絨段通

うえこみのじゅうたん



スタッフの面々と看板やサインをつくる



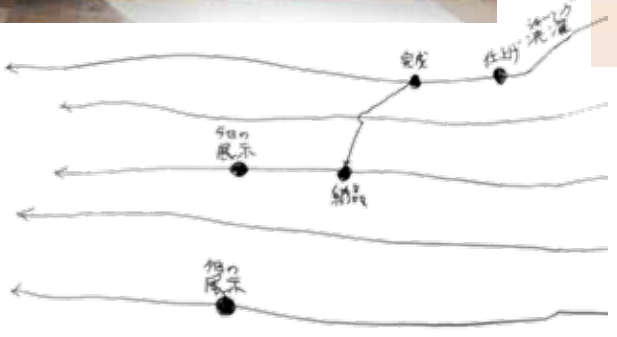
失敗や間違いを内包しながら作りつづける全体を繋ぎあわせるような作りかた。



治具

吉田のイラスト

えのくのじゅうたん



それぞれの日々は展示後もつづく。

「植え込み」の練習 作ったもの

僕は、その障がいのある人たちと、ケアスタッフの関係性が「羨ましかった」の



ねんどのじゅうたんワークショップ



モチーフはリーストのメス



おむじパッケージがたふさん並ぶとこけしの顔のようにそれぞれに個性が出ていておもしろい



ねんどのじゅうたん



“My New Traditional Collection” selected by Katsunobu Yoshida
《miamoo.》福岡左知子作／布（綿）、お守り／木・布（苧、葛）・石、ネックウォーマー／毛糸
織機／木、試作／羊毛・綿糸、ニューギニア島高地民族ダニ族の石斧／石・ヒクイドリの羽根
photo: Kohei Shikama

Document

ニュートラ日誌

2019 - 2020

ものをつくる・伝える・広げる多種多様な担い手たちと
出会い、そのなかで見てきたこと、語られた言葉を、
たんぽぽの家のスタッフが記録していく。

2019. 6.19 (水)

「第1回ニュートラ会議」@ Good Job! センター香芝／奈良

多様な実践者とともに、新しい 伝統
工芸を語るための言葉を探す



4名のゲストとともに、「ニュートラ」のあり方、福祉と伝統工芸の可能性について、約3時間にわたり議論しました。働くことをどのようにやりがい・幸福・収入へとつなげるか、本事業における「伝統工芸」「豊かさ」の定義づけ、ケアする側との関係性など、総合的に考える必要性を実感しました。特に、デザインリサーチの水野大二郎さんが話した「利用者だけではなく、その人たちをサポートする職員も含め、双方が誇りを持って働くにはどうしたらいいか」という問いに、はっとさせられました。また、ギャラリーの運営に携わる守屋里依さんの「ものが人を幸せにしている実感があると、作家の創造性が向上するのは」という言葉も印象的。人と人の関係だけではなく、もの与人、ものを介した他者との関係をとらえることも、“豊かさ”を考えることにつながっていきます。(岡部太郎)

ゲスト：加藤駿介 (NOTA&design 代表)、白水高広 (株式会社うなぎの寝床 代表)、水野大二郎 (京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授)、守屋里依 (ippo-plus) オブザーバー：多田智美 (編集者)、寺川真弓 (染織家)、長岡綾子 (デザイナー)、播磨靖夫 (一般財団法人たんぽぽの家 理事長)、原田祐馬 (デザイナー)

6.25 (火)

アドバイザーへの聞き取り@ Good Job! センター香芝／奈良

伝統工芸の未来をイメージするために

ててて協同組合の永田宙郷さんに、伝統工芸の定義や現状、伝え方や新しい市場のつくり方などについて聞き取りを行いました。工芸を構成する要素として、マテリアル (素材)、テクニック (技術、道具)、スピリッツ (思い、こだわり)、そしてレイヤー (歴史を重ねた風土) があり、これらのどれかの要素を変えてみることで、新しいものづくりの可能性が見えてくる、といった話や、分野を横断した異なるものの組み合わせによって生まれる工芸をプロデュースしている事例を紹介いただきました。全国のつくり手、産地などの豊富なネットワークから、ニュートラが取り組むべき道筋がおぼろげながら見えてきました。(岡部太郎)

6.30 (日)

お茶会@ 足高邸／奈良

五感を通してものや空間を楽しみ、
文化を感じるお茶会の実施



photo: Natsumi Kuwagata

生活空間において、障害のある人の表現と伝統文化の出会いを実際に感じられる場をつくる試みとして、築90年の古民家で、お茶会を開催。当日は年の前半の穢れを祓い、後半の無事を願う「夏越の祓 (はらえ)」であり、参加者は最初に茅の輪を腕に合わせて小さくしたものを選び、お茶会に参加。1席目は、蔵につくられた茶席で桑とミントの甘くさわやかなお茶をいただきました。2席目は座敷に移動し、この季節の和菓子・水無月もいただきました。絵画作品や、茶布のしつらえのなかで、かつて葉の間屋を営んでいた足高邸の歴史や夏越の祓の儀式について話を聞きながら、五感でお茶と空間を味わうぜいたくな時間。お茶会としての場が、お茶の道具や空間のしつらえ、季節の行事、家の歴史など含めて、さまざまなものを楽しみ、交流する機会となることを実感しました。(森下静香)

お茶：蘭茶、アリスサ工房 菓子：蘭茶 絵画：前田考美 茶布：アリスサ工房

8.29 (木) ～ 31 (土)

活動調査：しょうぶ学園、ワークプレイスハイホー、good day、Lanka、花の木ファームほか／鹿児島

Good Job! Travel でさまざまな現場を訪問

鹿児島を拠点にもものづくりやアート活動、食品生産などを行う福祉施設や工房、ショップなどを訪問するツアーを実施し「しょうぶ学園」や、竹細工に取り組む「ワークプレイスハイホー」を訪問。鹿児島ならではの素材や環境で生まれるものづくりを堪能しました。生活を豊かにするプロダクトは、そのプロセスに魅力的な環境づくりや人の関わり合いがあります。現場を訪問することで、障害のある人が誇りを持って働くことの大切さや、妥協をせずに品質を追求する姿勢に出会うと同時に、価格設定や広報のあり方など、ものを伝えていくときの課題を知ることができました。また、参加者同士で話題を共有し、各々の現場に持ち帰るなど、さまざまな視点から楽しめる3日間となりました。(岡部太郎)

10.12 (土) ～ 13 (日)

「つくることの喜びにふれる二日間」@ 足高邸／奈良
※台風19号の影響により12日は開催中止

生活空間のなかの表現を、 いろいろな人たちと考える



6月のお茶会を経て、足高邸を舞台に本プロジェクトの核心である、ものをつくることに触れる、2日間のイベントを企画。

お茶会をどのように開催するか、そこに障害のある人がどう関わることができるのか。守屋さんから提案のあった障害のあるメンバーがお茶を入れる側にまわるということを実現するにあたり、守屋さんとメンバーの花谷龍介さんを中心にお茶をいれ一緒に過ごす時間ももちました。当日は、会場となった蔵や座敷に澤井さんの作品をしつらえ、特に蔵のなかは静かにお茶をいれる音や香りを楽しめる異空間のような場に。後日、花谷さんが Good Job! センターのホワイトボードに描いた絵を見て、お茶会が花谷さんにとっても印象深い出来事だったのだと伝わってきました。

前日の11日には、足高邸の新しい形を見てもらおうと、地域の方にお声がけしました。小さい頃からこの地域に住んでいる方々が、なつかしい想いで家を訪問し、澤井さんの絵がしつらえられた空間を楽しんでくれたことは、大家である足高さん、そして私たちにとってもうれしいことでした。(森下静香)

茶：花谷龍介、守屋里依 菓子：Neu 絵画：澤井玲衣子 音：「piano language」(作：原摩利彦&澤井玲衣子 & sonihouse) しつらえ：守屋里依 モマ笛絵つけ体験：原田翔平(筑前津屋崎人形巧房8代目) 旅商：うなぎの寝床、GOOD JOB STORE



ニュートラ談義

白水高店(株式会社うなぎの寝床代表取締役)さんと永田宙郷(合同会社てて協働組合共同代表)さんをオンラインでつなぎ、「今、ものをつくり、ものを伝える(売る)こと」について話し合う場をもちました。白水さんからは、「ものを伝えるときのフォーマットとして、つくり手の想いから広げていく方法、また生活者にあわせてフォーマットを選ぶにつくっていく方法のふたつが考えられる」「いろいろな人たちに響かせられるように、この二方向だけではなく、さまざまなフォーマットや表現を組み合わせていくことが重要」ということが伝えられました。また、永田さんからは「ものを売るという感覚よりも、仲間を増やすにはどうしたらいいかという感覚がある」という話がありました。

12.4 (水)

スタッフ会議@たんぼほの家／奈良

これからのニュートラ、どう進める？

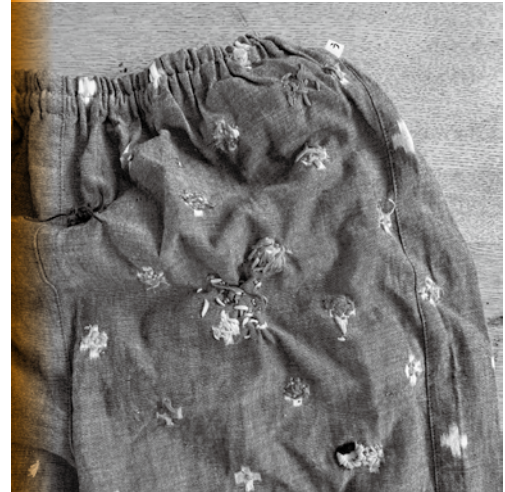
今年の取り組みを振り返りながら、改めてニュートラでめざすこと、それを実現するためにどうするのか、理事長の播磨を交えて会議を行いました。ものづくりのプロだけでなく、アマチュアにも光が当たってほしいということ。実用性だけにこだわらないからこそ依り代になれるような、「趣味的でおしゃれ」なものが必要だということ。大きな視点からニュートラを考えることができた日でした(中島香織)。

参加者：一般財団法人たんぼほの家スタッフ、Good Job! センター香芝スタッフ、多田智美(MUESUM)、永江大(MUESUM)

2020. 1.10 (金)

ニュートラ実例づくり @ たんぼほの家アートセンター HANA & Good Job! センター香芝／奈良

伝統工芸と福祉における、 ものづくりの交換



うなぎの寝床から到着したB品(ほつれや傷があるが、使用には問題ない状態)のもんぺをベースに、アートセンター HANA や Good Job! センターのメンバーが刺繍、シルクスクリーンプリントを施し「コラボもんぺ」を制作しました。福岡・津屋崎で230年以上の伝統を持つ郷土玩具「津屋崎人形」の看板商品「モマ笛」と、Good Job! センターの看板商品「Good Dog はりこ」のベースを交換し、お互いが絵つけをする試みも。(岡部太郎)

3.7 (土) ～ 21 (土)

もんべ博@たんぼほの家アートセンター HANA ギャラリー／奈良
東北・奈良・九州の郷土玩具～出張 MUTO & 津屋崎人形 @ Good Job! センター香芝／奈良

ものを見る、ものを買う楽しみを 実感すること



たんぼほの家のふたつのスペースで、展覧会を実施。アートセンター HANA ギャラリーでは、1月から取り組んだコラボもんぺを展示、販売しました。

Good Job! センターでは、秋田に店舗を構え、東北の郷土玩具を販売する「MUTO」セレクトの郷土玩具、そして福岡の「津屋崎人形」と一緒に、Good Job! センターが開館当初から取り組んできた張子を展示しました。もんべや郷土玩具のある空間はとても新鮮で、楽しさがあふれており、新型コロナウイルスが広がりはじめた不安な時期に、ものを見て買う楽しさを実感する機会となりました。(森下静香)

～ 3.25 (水)

福祉×伝統工芸の活動調査

約1年かけて全国をまわった ニュートラの活動調査が終了！

福祉施設や工房、セレクトショップなど全国12カ所を訪問。ものづくりや社会に対する考えを聞いていくなかで、地域や素材への愛情などを毎回感じました。それぞれの現場に身を置いてみると、人、道具、環境などが関わり、コミュニケーションが生まれていることを体感。「誰かとともに働くこととは?」「ものをつくること、使うこととは?」など、訪問したスタッフが自分の仕事や生活を顧みたこともしばしばでした。

なかには、じっくりと活動するためにあえて生産量を上げず、ものづくりの空間や工程を大切にす事例や、反対にたくさん受注して製造を安定化することで、まずは技術を身につけるという活動も。

ものづくりを継続するための課題に向き合いながら、それぞれが目的を持ったものづくりに取り組み、障害のある人も、関わる職員も誇りを持って働くことを大切にしていました。(中島香織)

訪問先：株式会社あいライク(紅型)／沖縄、社会福祉法人トゥムスイ福祉会(銀細工)／沖縄、クラフト工房 La Mano(織り・染め・加工)／東京、合同会社あいびい 愛工房(赤間石アクセサリー)／山口、合同会社ラディカルランド ワークプレイスハイホー(竹・紙細工)／鹿児島、社会福祉法人太陽会 工房しょうぶ(漆器・木工・陶芸ほか)／鹿児島、京都市保健福祉局障害保健福祉推進室(伝福連携事業)／京都、NPO 法人おりもんや(栽培・糸紡ぎ・染め・織り・加工)／鳥取、有限会社中村ローソク(和ろうそく)／京都、橋本広司民芸(福島)、東北の酒と玩具 MUTO(秋田)、蔵六面工房(山形)

必ずしも生活を便利にしたり、効率を上げるものではない。ものを通して伝え手、使い手に、そのものでしか得られない体験を約束すること。

ー 永田宙郷（合同会社ててて協同組合 共同代表／プランニングディレクター）

ものを伝えるときに永田さんが大事にしているのは、プロジェクト（企画すること）、プロセス（ものづくりの過程）、プロフィット（利益）、そしてプロミス（約束）。使い手だけではなく、ときにはショップ店員にものの魅力を伝えることが、結果的に長期的で良好な取引になることもある。そんな事例を語るなかで出てきた言葉。（2019年10月 足高邸にて）

ものづくりに関わる多様な人たちとの議論を通して出てきた言葉の数々。

つくり手同士が刺激し合ったり、頭と手の行ったり来たりがある状況をつくる。

ー 白水高広（株式会社うなぎの寝床 代表）

福祉の現場で新鮮だったのは、障害のある人やサポートする人、外部の専門性を持った人たちが関わり合っていること。それぞれが考えたり手を動かしたりしているので、ものづくりのプロセスで自然と複数の視点が生まれる。この新鮮な関わり方や視点の持ち方を、もっと各地の伝統工芸のつくり手たちが参考にしたらいいのではないかというメッセージ。（2019年10月 足高邸にて）

障害のある人がお茶をいれる側にまわったら、楽しいと思いませんか？

ー 守屋里依（ippo-plus）

2019年10月開催のお茶会に向けて守屋さんがたんぼぼの家や Good Job! センター香芝を訪問。創作や仕事を通して障害のある人と出会ったなかでの言葉。（2019年8月 たんぼぼの家にて）

地域のなかに、ものづくりを核に障害のある人も含めた共同体をつくるという発想が大切だ。

ー 播磨靖夫（たんぼぼの家 理事長）

播磨は50年近く前に新聞記者として高松に赴任、伝統工芸や職人の世界を記録する「讃岐の手仕事」という連載に取り組みなど日本の伝統美にリスペクトを持っていた。障害のある人も私たち自身が、「使う側」から「つくる側」にまわっていくこと。「つくることでいろいろな人とつながっていくことができる」という言葉が本プロジェクトを進める上でスタッフの間に通底している。（2019年11月 たんぼぼの家にて）

ものから「？」が浮かんでくる、その出会いをイメージしながらものをつくる。

ー 原田祐馬（UMA/design farm）

使い手が「これはこうである、こう使う」と思い込んでいた前提を超えるものづくり。それを考えることが本プロジェクトの大きなポイントではないか。原田さん 流にいうと「？」を生み出すプロセスをどうつくるか。（2019年11月 たんぼぼの家にて）

具体的にどれくらい賃金があればいいのか、それをどう使うのが豊かなのか。

ー 水野大二郎（京都工芸繊維大学 Kyoto Design Lab 特任教授）

障害者福祉の就労の現場でも「稼ぐ」ことの重要性が謳われている。だが、障害のある人がいくら稼ぐのが望ましいかは、それぞれによって異なるのが実情である。そして、仕事の対価としてお金を稼ぐだけではなく、人生を楽しむためのお金の使い方や、仕事を通じて人とつながる機会をつくることも重要である。（2019年6月 Good Job! センター香芝にて）

障害のある人だけでなく、スタッフやボランティアやパートの人などいろんな人がものづくりに関わっているのが、HANAの良さだなんて。

ー 是永ゆうこ（たんぼぼの家アートセンター HANA スタッフ）

うなぎの寝床でB品として眠っていたもんべに、障害のあるメンバーが刺繍やプリントを施す「コラボもんべ」の制作を終えて。是永自身、もんべをつくった職人に思いを馳せながら取り組み、さまざまな人の手を経てものができていくことを実感。これまでの施設内でのものづくりを見直す機会となった。（2020年3月 たんぼぼの家にて）



“My New Traditional Collection” selected by Katsunobu Yoshida
インドネシアの部族の面／骨、《仮面》萩原宏一郎作／紙・アクリル 絵の具
photo: Kohei Shikama

ものが持つ、複雑な質感や強度を伝えるための作法・方法

収録：2020年6月3日(水)

NOTA&design / デザイナー
加藤駿介さんに聞く



—新型コロナウイルスの影響が、いろんな形で社会に現れています。

NOTA_SHOPも4月から5月は展覧会を中止し、お店を閉めていました。世間では、オンラインの販売や展覧会が増えていましたが、日用品と違い機能を持たないオブジェや複雑な質感を持つ工芸品の魅力は、オンライン上で伝えきれないなと思い、実施しませんでした。6月にやっと展覧会を開催して、人の移動制限を考慮しつつオンラインでの開催も計画中です。

—Web上ではどんなことを？

実際に会って話す生活には、偶然の発見がさまざまな場面であり、そして効率化のみに準拠しないという良さがあるなと思って。オンライン上で活動する際には、あえて鑑賞者にちょっとしたハードルを設けて、ものと出会うための非合理的な仕組みも取り入れられたら面白いなと。オンラインに“無駄”を取り入れたいんですよ。工芸もアートも、基本的には生活空間のなかに置かれます。店舗のレイアウトで意識しているのは、もの単体に接近した見せ方ではなく、異なるものたちとの組み合わせをひとつの空間のなかで提示して、使い手の想像を膨らませるようなこと。ECサイト上でも、この「ものの組み合わせ」の変化を定期的に起こしつつ、Webならではの楽しみ方ができる仕掛けを構想中です。

かとう・しゅんすけ
1984年、滋賀県信楽町生まれ。東京の広告制作会社に勤務後、地元である信楽に戻り1981年に創業した家業である老舗「ヤマタツ陶業」にて陶器のデザイン、制作に従事。新しい陶器ブランドの設立や企業とのコラボレーションを社内にて構築後、陶器を軸にしたライフスタイル全般のデザイン、制作販売業務を行う「NOTA&design」を設立。

つくる・伝える・使うを循環させるものづくりの生態系

収録：2020年6月5日(金)

株式会社うなぎの寝床 代表取締役
白水高広さんに聞く



—伝統工芸×福祉の実践、取り組みをどのように見えていますか？

たんぽぽの家では、福祉・工芸・素材・知財といった異なる要素を組み合わせ、ものをつくる試行をしていますよね。そのフローを発信していくことによって、ほかの福祉施設がより主体的にものづくりや仕事に取り組むことにも寄与できる。また、ニュートラの実例づくりでは、「型」に対する変換プロセス（絵画作品を織物にする、粘土作品を3Dプリンタで出力するなど）を重ねることで、作家性を揺るがす面白いものが生まれている印象です。

—ニュートラを考える上で、重要なことって何だと思いますか？

ものづくりの生態系＝循環の仕組みから考えること。いま「KATAプロジェクト」という、ものづくりの循環の仕組みを構想中です。そのなかで、ものをつくる・伝える・使うに関わる人たちの生産や販売の経済圏、型紙という概念の解釈（レシピ、図面など）、知的財産権管理、品質管理、販売プラットフォームなどの要素を見直しています。この仕組みを利用することで、ものの価値が付与されると協働者が感じられる水準まで高め、知的財産権の社会への開き方を検討し、相互に豊かな状態でいられるバランスを試行中です。つくる・伝える・使うも含めた生態系に、次の伝統のあり方を見出せるのかなと考えています。

しらみず・たかひろ
1985年佐賀県生まれ、大分大学工学部卒業。2012年7月にアンテナショップ「うなぎの寝床」を立ち上げる。活動の幅はメーカー、コンサルティングなどへと広がり、地域文化商社と業態を変更させ展開を続ける。

ニュートラに関わる実践者に聞く

これからのものづくりを考える4つの視点

インターネットや最新技術によって変化する、創造性と豊かさのあり方

収録：2020年5月26日(火)

京都工芸繊維大学
Kyoto Design Lab 特任教授
水野大二郎さんに聞く



—いま、ものをつくることの周辺でどんな変化を見ていますか？

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人々の移動が制限されるに従い、物理的な場で物理的なものを売る・伝えることの意味が問い直され、同時に、形のない空間に形のないものを展開することに、日常的に親しむ人が増えてきているように感じます。つくる・伝える・買うという行為が、仮想的な情報の世界と分かちがたい状況になってきている。

—そんななか、つくり手も対応を迫られています。

物理的なものづくりは、これまでは観光客などの「動く人」を対象に、物理的な空間にとどまっていました。しかし今後は、ものをつくる際に物理的な素材・技法とデジタルのデータを組み合わせたり、情報伝達のためにWebメディアを駆使したり、つくったものを体験してもらうための工夫なども求められるでしょう。情報は重さがないので、スタートアップが簡単。既存のアプリ、オンラインメディアや決済システムの利活用のみならず、新しいWebサービス開発までさまざまな事例が見られます。このような物理的制約に縛られない活動領域は未来の伝統工芸や障害のある人のものづくりに影響を与えうるものです。業務効率化や利益最大化のためだけに情報技術を用いるのではなく、個人の能力を最大限引き出し、新しい創造性を生み出す可能性がそこにあります。

みずの・だいじろう
2008年Royal College of Art博士課程後期修了、芸術博士(ファッションデザイン)。京都大学デザインスクール 特任講師、慶應義塾大学環境情報学部准教授を経て現職。デザインと社会を架橋する多様なプロジェクトの企画・運営に携わる。

ものの伝え手としての人・もののよい関係性・距離感

収録：2020年6月22日(月)

ippo plus 主宰
守屋里依さんに聞く



—4月・5月の自粛期間中はどのように過ごされていましたか？

この数ヵ月、自然の美しさをより感じるという人が増えましたが、人がつくるものの美しさや尊さを体感する機会に飢えた人も多かった印象です。そのなかで、顧客の方から「ギャラリーで購入した作品が生活の潤いとなり、精神的な助けになった」という言葉を聞きました。東日本大震災のときも今回も「ギャラリー運営は社会に実益をもたらしていないのでは」と力のなさを感じていた折、いただいた一言によって仕事の意義を強く感じています。そして、自分のギャラリーは「体験や感覚に出会う場であること」を大事にしているのだと、より明瞭になりました。

—ニュートラの取り組みを通して考えたこと、感じたことを教えてください。

障害のある人の作品を紹介する際、これまでの自分であれば「障害」ということをあえて言わずにいました。しかし、実際に障害のある作家と関わったことで、その人が生きてきた時間を語る際に「障害」を抜きに語るのは不自然だと思ったんです。誤解をおそれず言えば、障害があるのと同時に優れた感性を持っているということを、うらやましく感じています。私はものの伝え手として、自分の心を動かすものをつくる、感性のある作家をうらやましく思いながら、同時に愛し、彼らを紹介するための作業を非常に楽しんで行っているのだなと改めて思います。

もりや・さとえ
大阪のギャラリー兼サロン、ippo plus と無由主宰。年に数回、作家の展覧会と美しさにまつわる催しを開いている。幼い頃から父親の影響で生活のなかに「お茶の時間」があり、自然とお茶と向き合うようになり、煎茶道を経て、2015年より台湾茶道 留白のPeru氏に師事。2017年より御菓子丸の杉山早陽子とともに、茶と菓子から拡がる美しさのいろいろを感じる会「景譜」を不定期に開催している。

多様な可能性から
見出すものづくりとは



文・高野賢二
(NPO法人 La Mano クラフト工房
La Mano 施設長)

鑑賞者の趣味嗜好はあれど、人を惹きつける作品の魅力とはなんだろうか。作品を前に頭で考えるのではなく、感じる、体感する……それらは何にもとづき、そう感じているのだろうか。

わたしの家は、祖父の代まで提灯屋をしていた。地元で350年以上続く「提灯祭り」に関わったり、一緒に住んでいた叔母が「華道」「茶道」の師範で、自分もその真似ごとをしたりと、文化的なものごとへの興味が幼少期からあった。その後は染色学校に行き、現在の仕事へとつながる。ただ、ものづくりに目覚めたのは、実は高校時代に美術の教科書で見たアメリカの画家、アンドリュース・ワイエスの《クリスティーナの世界》がきっかけだ。その作品を見てはじめて「作品が何かを伝えようとしている」のだと感じる事ができた。

そして、染色学校で受けた岡村吉右衛門先生のご指導をきっかけに、民藝運動や柳宗悦、芹沢銈介、バナード・リーチ、棟方志功に興味を持ち、素朴さのなかに美しいものを見る「用の美」が自分のものづくりの主題となった。

作品には、色や形、質感や材質、デザ



クラフト工房 La Mano の玄関先の風景

インなどの多様な要素があり、わたしたちはその複雑さに惹かれ、手にとって愛でたり、そこから何かを受け取ったりする。障害のある方のものであったり作品も、人々の生活を豊かにする可能性がある。彼らと、そんなものづくりをしていくことがわたしの「ニュートラ」だ。

たかの・けんじ
学生時代に東京で染色を学び2000年クラフト工房「La Mano」に入社。メンバーの絵を使った手ぬぐいや藍染の鯉のぼりの企画など、アート、クラフト、デザインが融合した商品制作に力を入れる。

プラスチックは
次の伝統へと変わるか



文・白井瞭
(リ・パブリックディレクター／
MOMENT 編集長)

織物や木工品、陶磁器をはじめとする伝統工芸品において、人類は数百年〜千年以上の時間をかけて、素材への理解を深め、技術開発を行ってきた。そのまなざしや姿勢から次の伝統を考えることはできないか。

現代の生活にもっとも身近な素材にプラスチックがあげられる。19世紀に生まれ、ここ50年ほどで急速に社会へと浸透したこの素材は、木材などとは違い、個人で加工したり製品をつくったりする方法はなかなか思い当たらない。

これはプラスチックゴミの問題が長年、解決されない理由のひとつでもある。一般的にプラスチックをリサイクルするには高額な設備を必要とするため、個人レベルでは手が出しにくい。

そこに着目したのが、「Precious Plastic」だ。廃プラスチック製品を細かく砕きチップ化して、ヒモ状に射出したり、押し出して固めたり、型通りに圧縮したりすることで、新たなプロダクトのための素材へと変えるこのプロジェクト。つくり手の想像力次第で、タイルやコップ、机や椅子、スケートボードにサンガラスと、さまざまなものが生まれる。



©Precious Plastic

そしてこれらの加工機をつくるための材料やプロセスはすべてYouTubeで公開され、いまでは世界で1000以上のマシンビルダーと組織、8万人以上のオンラインコミュニティをつくり出している。使い手をつくり手に変え、国境を超えてコミュニティを育む姿に、ニュートラのあり方を見たい。

しらい・りょう
2016年、オランダの学際的実践機関 MediaLAB Amsterdam を修了し、リ・パブリックに入社。2019年、同社よりトランスローカルマガジン「MOMENT」を創刊。

ニュートラ 掲示板



NEW TRADITIONAL のNote がオープン。
イベントのお知らせのほか、ものづくりに関する読み物も掲載しています。



ニュートラで生まれたものをオンライン
ショップで販売中。第一弾は米沢織通・
滝沢工房とのコラボレーション商品。



Instagram (@newtraditional_gjp) で
プロジェクトの様子を写真とともに
お伝えしています。

NEW TRADITIONAL PAPER 2019-2020

発行：2020年9月30日 | 発行元：一般財団法人たんばの家 〒630-8044 奈良県奈良市六条西3-25-4 Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 Mail nt@popo.or.jp | 企画制作：たんばの家（岡部太郎・後安美紀・中島香織・藤井克英・森下静香・那木萌美）編集ディレクション&編集：MUESUM（多田智美・永江大）アートディレクション&デザイン：UMA/design farm（原田祐馬・西野亮介）展示記録撮影：志鎌康平 発行・運営：一般財団法人たんばの家 | プロジェクトメンバー：岡部太郎・後安美紀・中島香織・藤井克英・森下静香・那木萌美 アドバイザリーボード：加藤駿介（NOTA&design 代表）白水高広（株式会社うなぎの寝床 代表）水野大二郎（京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授）守屋里依（ippo-plus）永田宙郷（合同会社ててて協同組合 共同代表）スーパーバイザー：播磨靖夫（一般財団法人たんばの家 理事長）多田智美（MUESUM 代表/編集者）原田祐馬（UMA/design farm 代表/デザイナー）